

No.179

令和2年7月29日

【発行】

豊橋市立青陵中学校 校長室

t-asai-h@toyohashi.ed.jp

Rising Sun



暑中お見舞い申しあげます

今年の梅雨入りは6月10日でした。平年の梅雨明けは7月21日頃ですので、もうとっくに梅雨明けしていてもおかしくないのに、どうもスカッとした天気にはなりません。7月の最終週にまで授業をしなければならぬ今年の私たちにとって、このところの暑さはさほどでもありませんので、ありがたいと思うべきなのでしょう。週間天気予報では、この先も☀️や🌧️ワークが続いていて、どうもすっきりしないようです。梅雨明けはいつになるのだろうと案じています

(ここからは *Rising Sun* No.21 からの引用です)

「暑中お見舞い申しあげます」と聞いて、どんなことを思い浮かべるでしょうか。私たちの世代は、やっぱりアイドルグループ「キャンディーズ」のあのヒット曲です。それはともかくとして、季節の挨拶状である暑中見舞いは、いつ頃出せばよいのでしょうか。残暑見舞いとの違いはどこにあるのでしょうか。

実は、「立秋」(今年は8月7日)を境に、暑中見舞いとして出すか残暑見舞いとして出すかが変わります。暑中見舞いは、梅雨明け後、夏の土用の期間(立秋前の18または19日間)に届けます。ですから、ちょうど今頃がベストタイミングです。一方残暑見舞いは、立秋を過ぎてから、処暑の候(8月23日~9月6日頃)までが目安となっています。

かつて豊橋市内の小中学校では、前年度に卒業した児童生徒、つまり中1と高1の子たちに、前担任が暑中見舞いのハガキを出すという取り組みをしていました。残念ながら今では財政難のために全市的な取り組みはなされていません。私も担任をしていた頃、前年度卒業させた子どもたちにはもちろん、現在担任している子どもたち全員に暑中見舞いを出していたことがあります。お取り組みしていただいている先生もいらっしゃるかもしれませんが、まだのかたはぜひ一度試してみてください。担任の先生からハガキが届けば、どんな子だってうれしいはずですよ(強制ではありませんよ)。

20代の後半、担任していた子の中にOさんという女子がいました。6年生の1年間だけ担任をした子です。クラスの中では存在感があり、運動もよくできたためリーダー的な存在でした。ただ、思春期にさしかかろうとする年頃の女の子です。特に大きなトラブルのようなことはなかったのですが、私とはなんとなく折り合いが悪く、すれ違ってばかりいました。授業が終わって話しかけようとしても、「先生なんか大っ嫌い!」「あっち行って!」の一点張りで、取りつく島もない状態でした。

その年の夏も担任していたクラスの子全員に暑中見舞いを出しました。毎日のように学級通信を出していましたので、学級通信の「増刊号」というスタイルにして送りました。折り返し多くの子から夏休み中の様子を知らせるハガキが届きました。その中に残念ながらOさんからの返信はありませんでした。

暑中見舞いと同じようにして、年賀状も学級通信の増刊号としてクラスの子たち全員に送りました。やっぱり今度もOさんからの返信はありませんでした。

Oさんとの関係は、さほど改善されないまま、とうとう卒業式を迎えてしまいました。

そんなOさんが、卒業してからというもの小学校へちょくちょく寄ってくれるようになったのです。担任していてときよりも、なんだか肩の力が抜けて気楽に話すことができるようになっていきました。中学校のときだけでなく、高校へ進学してからも近況を報告しに、ときどき小学校へ立ち寄ってくれました。

高校を卒業するとすぐに彼女は免許を取得しました。免許を取ったことがよっぽどうれしかったのか、車を運転して私の家まで遊びに来るというのです。同級生の3人と一緒にやって来た彼女と、昔話に花を咲かせました。ひとしきり話したあと、Oさんは2枚のハガキを大事そうにバッグから取り出して見せてくれたのです。それは、あのときの暑中見舞いと年賀状でした。